

小説版「黒い大西洋」における「多舌のコーラス」による 終わりなき代補

——キャリル・フィリップス『クロッシング・ザ・リバー』（1993）論——

小林 英里

はじめに

「河を渡る全ての人へ」という献辞が巻頭に掲げられている『クロッシング・ザ・リバー』（1993年）は、ブラック・ブリティッシュ作家キャリル・フィリップスの手による5作目の小説である¹。この小説は同年のブッカー賞の最終候補作品であった。同賞の受賞は逃したものの、翌年にはジェイムズ・テイト・ブラック・メモリアル賞を受賞しており、フィリップスの代表的な作品とされている。さらに2017年には、フランスの大学のカリキュラムで特別文学作品として選ばれており（Agregation d'anglais）、フランスの高等教育カリキュラムでの読むべき必須の作品となっていた。このカリキュラムへの導入は研究面における同作品の重要性にもつながっており、例えば2017年の5月にはカーン大学で『クロッシング・ザ・リバー』と作家キャリル・フィリップスに特化した国際会議が開催されている。結果として、ここ数年で『クロッシング・ザ・リバー』にかんする雑誌論文や、フィリップスの作品全般についての単著など、研究成果の刊行物が世に出ている²。

先行研究に目を向けると、『クロッシング・ザ・リバー』は、ポストコロニアル批評³やポストモダニズム研究と歴史記述の問題系⁴としてしばしば議論されてきた。最近では「奴隷制」の「倫理性」を問う批評の傾向から、メモリー・スタディーズ⁵やトラウマ研究⁶などの学問分野からの批評がなされている。そこで本論文では、こうした先行研究を参照しつつ、まずはポール・ギルロイの『黒い大西洋』が同じく1993年に出版されたことに着目し、本作品が小説版の「黒い大西洋」であるという位置づけをおこないたい。小説プロローグで「多舌のコーラス」（1）という概念が導入される。そのあと小説本文では、この「多舌のコーラス」が、アフリカ、アメリカ、イギリスという大西洋をめぐる三角貿易時代とそれ以降の歴史をなぞるかのよう、黒人たちの離散のようすとして、複数の場所と複数の時代において、記述されて

いく。そして最後のエピローグでは、かれらは困難を克服しつつ、「河」である大西洋を渡り、最終的には「共通の記憶」(237)を有した「生存者の声」(237)として「多舌のコーラス」を歌い続けているのだと結論される。本論文では、本小説が奴隷貿易を始点とするヨーロッパ近代を、行為遂行的に「黒い大西洋」の歴史／物語によって、そしてさらに「女の大西洋」によって、代補⁷していく過程を示すものと解釈し、そのようすを分析する。

1. ふたつの「黒い大西洋」

「なんという愚かしさ。不作だったからだ。わたしは子どもを売った」(1)という18世紀のアフリカの名もなき父親による語りによって、小説『クロッシング・ザ・リバー』は幕を開ける。子どもたちとは「わたしのナッシュ。わたしのマーサ。わたしのトラヴィス」(1)である。アフリカの父のこの語りのプロローグを経て、小説第一部は19世紀に自由黒人となってアメリカから西アフリカのリベリアへ宣教師として赴任するナッシュの物語、第二部は19世紀のアメリカで自由を求めて西部への移動を試みるマーサの物語、第三部では奴隷商船のイギリス人船長ハミルトンの航海日誌が引用されたあとで、第四部は第二次世界大戦中に黒人の米兵としてイングランドに赴任するトラヴィスの物語が記述される。ただし第四部はトラヴィスとのあいだに子どもをもうけるイギリス人女性のジョイスの視点から語られる。エピローグでは、語りは再びアフリカの父の語りに戻り、奴隷制とその結果である黒人の離散経験を嘆きつつも、子どもたちは「生き延びたのだ」(237)という一縷の希望を示して、小説は幕を閉じる。

序論で述べたように、『クロッシング・ザ・リバー』について、出版当時の90年代半ばから2000年代にかけての研究は、ポストコロニアル批評の観点から論じられることが多かった。本小説を論じるベネディクト・リーデント(“Overlapping,” 55)とアビゲイル・ウォード(*Caryl Phillips*, 46)は、ともにエドワード・サイードの著作を参照しながら、アフリカの子どもたちが生き残ったのはさまざまな異なった要素と「結びついた」からだとしている。サイードは『文化と帝国主義』(1994年)の末部で「生き残るということは、じつはふたつのものをつなぐことである」(336)としている。リーデントは、本書においては複数の異なる文化がつながれていくがゆえに、アフリカの子

どもたちは生き残れたのだという解釈をしているし(56)、他方ウォードは『クロッシング・ザ・リバー』が示す大西洋奴隷貿易による「予想も出来ないような人々、世紀、国々、歴史の結びつき」(“Outreached,” 20)が作品理解の要だとしている。確かに、断片的な語りが採用されているとはいえ、小説は複数の時代と複数の地域を結びつけており⁸、最終的には登場人物たちは家族と別離するという結果を迎えても、人種もジェンダーも異なる人々が、一時的であるにせよ、接触し交流していく物語である⁹。

キャリル・フィリップス自身も1994年におこなわれたインタビューのなかで、「つなぐこと／結びつくこと」と「生き延びること」というサイドと全く同じ表現を用いて、『クロッシング・ザ・リバー』で実現したかった点について述べている。

取り残されたアフリカ世界と、いったん人々が河を渡ったら足を踏み入れることになるディアスポラの世界とを、結びつけたかったのだ。搾取や苦しみやみじめさに基づいた結びつきではなく、肯定的な結びつきを、一種の生き延びることに基づいた結びつきを、作りたかった。この本は多くにとっては尋常ではないほど楽観的な本なのだ。(Conversation, 21)

『クロッシング・ザ・リバー』の出版は1993年であり、サイドの『文化と帝国主義』は1994年に公刊されている。西洋の近代性を奴隷制によって代補するポストコロニアル研究において重要な著作が、やはり1990年代の前半に世に出ている。ポール・ギルロイの手によって1993年に刊行された『ブラック・アトランティック 近代性と二重意識』である。序文において、ギルロイは同著の構想を得たのがロンドン南部の専門学校で「社会学史を教えたとき」(I) だったと述べている。ヨーロッパの啓蒙主義やこれらに対抗する思想に対して、「黒人著述家たちが異議を申し立てながら貢献してきたこと」(I) や「黒人たちの経験が、…近代性の一部であること」(I)、さらに「西洋の擁護者として、ときに鋭い批判者として、黒人知識人が近代世界に組み込まれ、…発言してきたこと」(I) を学生たちに伝えようと必死であったと述べている。「ブラック・アトランティック」つまり「黒い大西洋」とは、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパを横断する広大な時空間の「間文化的でトランスナショナルな形成」(I) をさしている。ここでギルロイが試み

ていることは、伝統的な従来の時空間にかんする概念の再考である。そしてかれが構築したいのは、つねに移動を余儀なくされた人たちのための、固定的でリニアな一続きの歴史に代わり、断片的で、時間軸をときに乱すような、回帰的な歴史である。この点において「黒大西洋」は、従来の歴史で説明される近代ヨーロッパの代補であるという解釈も成り立つだろう。

『黒い大西洋』でギルロイは、第一章ではヨーロッパ近代のナショナリスティックなパラダイムが「黒い大西洋」では完全な機能不全におちいることを提示している。第二章では、奴隷制がじつは西洋文明にとって不可欠な要素であったことが、「主人／女主人／奴隷」という修辞を通じて、議論される。ここでも奴隷制は西洋近代文明の代補だったと解釈できる。第三章では「黒い大西洋」の根幹をなしてきた黒人音楽について論じられている。第四章ではW. B. デュボイスが、第五章ではリチャード・ライトが議論される。最終章ではアフリカ中心主義が批判的に検討され、「ディアスポラ」という従来はユダヤ人離散をさす言葉が「ブラック・ディアスポラ」という「黒人離散」の問題へと拡大されていくさまが考察される。そしてこの結部では「黒人とユダヤ人との交流が、黒い大西洋の政治文化の歴史においても、未来においても、重要である」(XI) とされる¹⁰。書物全体を通じて、思想とは不可避にも異種混交的であり、あらゆるアイデンティティが不安定であり、それゆえつねにすでに変更可能であるという点が強調されている。

ギルロイの『黒い大西洋』が文化思想史をおもに扱っていたのに対して、『クロッシング・ザ・リバー』は「黒い大西洋」というギルロイ的な概念を、小説という形式で表現しているといえるだろう。プロローグとエピローグの語り手にアフリカの父を採用し、小説の中心をなす部分では、物語の舞台がアフリカからアメリカへ、そしてイギリスへと移っていくという方向性からも、『クロッシング・ザ・リバー』は大西洋をめぐる奴隷貿易の時代とその後を描いた小説版の「黒い大西洋」であることがわかる。

『クロッシング・ザ・リバー』とギルロイの『黒い大西洋』との類似点は、奴隷制をめぐる歴史についての再考という点だけではない。『黒い大西洋』の第三章においてギルロイは黒人音楽という主題を追求していくが、『クロッシング・ザ・リバー』においても音楽のイメージは小説全体を通底するものである。「多舌のコーラス」という修辞に明らかなように、小説冒頭で「コーラス」という音楽の概念が導入されるのである。さらに、タイトルの

「クロッシング」という表現は、ヘレン・トマスの指摘によれば、「北米や中南米の農園の黒人奴隷によって歌われていた黒人霊歌“One More River to Cross”から取られた」(40) 可能性が高い¹¹。

続く小説第二部の「西部」と題されたマーサのセクションでは、再び奴隷のオークションに出されるのを拒否して、逃亡奴隷になることを選択した彼女の姿が描写されている。逃亡のシーンでは、逃亡のようすを叙述するのに、黒人の教会の説教時や賛美歌のときに用いられる「掛け合い（コール・アンド・レスポンス）」形式が採用されている。

その晩マーサは荷物をまとめてホフマン家を出た。どこへいくのか定かではなかった（どこでもいいわ）。あの大きな川から離れる（地獄から離れる）。境界のミズーリ州へ戻って、またマーサを売買する商人たちから離れる。星々でいっぱい夜空を眺めた（いい気分だわ）。何も聞こえなかった（ありがとう）。もうオークション台に上がるのはごめん（決して）。名前が変わるのもいやだわ（絶対に）。大きな柳の木の下で（もうだれもわたしを所有していない）。(81)

「クロッシング・ザ・リバー」と題されている小説第三部は、奴隷貿易に携わるジェイムズ・ハミルトン船長の航海日誌となっている。作者フィリップスは小説謝辞において「18世紀のジョン・ニュートンの『奴隷商人の日誌』が第三部にかんして貴重な情報源となった」と述べている。ジョン・ニュートンは奴隷商人から牧師となった人物で、一般には賛美歌「アメイジング・グレイス」の作詞者として知られている。ゆえに、ここ第三部においては、「ジョン・ニュートン」という名前から「アメイジング・グレイス」という賛美歌とそのメロディが自ずと連想されてくる。

ほか第一部「異教の岸辺」と第四部の「イングランドのどこかで」においても黒人による賛美歌が効果的に取り入れられている。第一部では、解放奴隷でリベリアへ向かったものの行方知れずとなったナッシュ・ウィリアムズの元居住地を訪れた元主人のエドワード・ウィリアムズが、あまりの不衛生さに驚き、心を静めようとして賛美歌を口ずさむが、「言葉は出てきても、音は出てこなかった」(69)とある。この場面では、「黒い大西洋」に属する人々は音楽と調和するのに対して、「ヨーロッパ近代」側に属する人々は、音楽

とは調和しないことが示唆されている。

第四部では白人イギリス人女性のジョイスが、第二次世界大戦中、自分の住む村に米兵が赴任してくるのを目の当たりにする。米兵には黒人兵が含まれていた。そのようなある日のこと、村の教会からこれまで聞いたこともないような歌が聞こえてきて、ジョイスは魅了される。彼女の日記には、このときのことが以下のように記されている。

1942年11月

教会の外に立って、冬はもうすぐだと考えていた。すると、かれらの声が聞こえてきた。かれらだと思った。だって、村のだれもあんな歌い方はしないから。あんなふうには。わたしは木のことも冬のことも忘れて、ただ教会を眺め、かれらの歌声と拍手の音を聞いていた。通りの向こうには年老いたウィリアムズさんが犬を連れて散歩していた。かれもわたしと同様に、これまで聞いたことのないものを聞いているというようすだった。わたしたち二人だけが聞いていた。(146)

このように、ギルロイの『黒い大西洋』と同様に、『クロッシング・ザ・リバー』も黒人音楽にこだわり、それを効果的に文学的修辭として取り入れながら創作された作品であるといえよう。

2-1. 罪悪感、記憶／トラウマ、ポストメモリー、スクリーン・メモリー

音楽のほかに小説全体に通底するテーマとして指摘したいのは、親子関係をめぐる「罪悪感」の感情である。「罪悪感」とは人の心理状況にかかわるものであり、本論文の冒頭で述べたように、『クロッシング・ザ・リバー』にかんする批評は最近ではメモリー・スタディーズやトラウマ研究からのものも出てきている。本部分においては、この「罪悪感」を補助線にして、登場人物たちの記憶やトラウマについて考えていく。

小説冒頭のアフリカの父の言葉「なんという愚かしさ。不作だったからだ。わたしは子どもを売った。そのことは忘れない」(1)は、作中で三度ほど反復される。プロローグで二回、エピローグの最終部分である。ニック・ベントレーが指摘するように、繰り返しによるアフリカの父のこの言葉の強調が示しているのは、第一に「罪悪感」(24)であり、第二に「絶望的な経済状

況ゆえの行為の正当化」である。最後の「忘れない」という行為は積極的な行為、いやむしろ強迫観念的な行為であり、父親は「忘れない」ことで「子どもを売った」というトラウマ的な行為を何度も追体験していることが示唆される。加えて、ここでのアフリカの父の語りは聞き手を想定しているようにも聞こえる。「覚えている／忘れない」という父親の意見表明を、わたしたち読者は耳にしていることになるからだ。こうして、父親の個人的なトラウマ経験は、読者を含む集団のトラウマへと置換される。アフリカの父が「共通の記憶のコーラスがわたしに憑依し始める」(1)と、まるで亡霊を思わせるような不穏な表現でもって語ることで、売られた子どもたちが父親の記憶にとりついて、自分たちを忘れさせないようにしていると解釈できよう。この父親の不安感はわたしたち読者にも伝染する。

フランソワ・クラウは、フランスの歴史家ピエール・ノラを引用しつつ、人は「忘れないという義務」(117)を負うと述べている。「記憶とは覚えておかなくとはという思いに結局のところ依拠しているのであり、これなくしては記憶は成立しない」(117)と彼女はいう。小説冒頭のアフリカの父の言葉は「忘れない」という「言葉」でもあり、同時に「忘れない」という「行為」でもある。かれのこの言葉が「行為遂行性の入り口／始まり」(119)となり、これが作品中で家族の別離の物語として反復されることで、父親個人の「トラウマ的な記憶が、[読者を含んだ集団の]ナラティヴの記憶へ変換される」(114)。事実、プロローグではトラウマでしかなかったアフリカの父の記憶は、小説中心部分のナラティヴを経て、一人一人の「声」として発せられることで、トラウマからの回復とはいわないまでも、トラウマを超えてある種のカタルシスへと変換される。

2-2. 母と娘

こうした記憶や亡霊、そしてトラウマという概念に最も密接にかかわってくる部分は、第二部の「西部」である。ここでは、第三人称の語り手および奴隷のマーサが語りをつとめる。取り扱われている時代は、アメリカの奴隷制の時代と南北戦争終結を経てゴールドラッシュたけなわの19世紀初頭までの時代である。ただし、時間軸に沿って語られるのではなく、マーサの記憶の中での彼女の人物物語が、現在と過去を行き来しながら、ときにフラッシュバック場面を含みながら、そして死期迫るマーサの白昼夢も取り入れられ

ながら、語られていく。

マーサの記憶のなかではアフリカを出発したときのことがおぼろげながらに浮かび上がる。「西部」の冒頭は、以下のような印象深い語りで始まる。

寒さに身体を丸めながら、マーサは戸口の前にうずくまって、今晚雪が見られるかしらと考えた。美しい。頭は上げず目だけを上げた彼女は、彼女と再び一緒の仲間となった広い黒い空をじっと見つめた。白い雪よ、早く降れ。長いオーバーコートを着た背の高い男性が、そしてひげを整えたばかりの男性が、顎を胸にあてながら通りすぎるときに、彼女を見た。一瞬、この男性が自分に向かってつばを吐きかけるのではないかと心配したが、そうしなかった。ここはコロラドなのね。草原と砂漠を越えてきたのだから。早くここも通り過ぎるといいわね。びっこのラバのように愚かにも倒れていられないわ。おばあさんになったわ。かれらは彼女を幌馬車から降ろし、カリフォルニアへ向かった。彼女は暴力的に下ろされた。霧の中、マーサは先祖返りしたかのように東部のことを思い出した。カンザスを超えて、母親だったころのこと、10代のときのこと、ヴァージニアへ到着したときのこと、男性一人と二人の少年とともに震えながら白い砂浜へ行ったときのこと。立ち上がると船が。彼女の船旅は長かった。しかし今では太陽が沈んでしまった。彼女の人生は終わりを迎えつつある。神さま/お父さん、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。(73)

マーサの人生が、時間軸に反して語られていく。奴隷として下から上を見上げる生活が長かったのであろう。男性に蹴られるかと思っただけ、蹴られなかったため、そこで初めてここは自由州だと納得するマーサ。さらに最後の神への言葉は、アフリカの父への言葉ともとれる。

マーサが一番明確に覚えているのは、アメリカのヴァージニア州で奴隷だったときのことである。奴隷主が死去したため、夫のルーカスと愛娘イライザ・マエ¹²とともにオークション台に立ち、家族はそれぞれ別の農園主に購入されるという場面が、彼女にとっては一番受け入れがたい現実であり、トラウマとして深く心に刻まれる。

農園主たちが全国から集まった。値段などを言い争っていた。そのなかに細面の顔をいくつかみた。オークショナーは正式にオークションを始めた。暗い色のチョッキ、モーニングコート姿。怒鳴り続ける。わたしたちに近づいてくる。わたしの喉は渴いていた。イライザ・マエがせわしなく動き回るので、手を握った。泣き出すイライザ・マエ。静かにさせるために彼女をつねった。ごめんなさい。でもこれがあなたのためなの。オークショナーは買い手たちに向かってうなづく。まずかれらは男たちをみる。買い手の一人がルーカスの筋肉を棒でつつく。もし買い手が男を買うなら、それは川を下ること、つまり死を意味する。それだけは十分くらい分かっている。家の中での仕事をしてほしい家庭から来た人は、あるいは女の子を産んでほしいという農場主たちは、わたしたちをみる。自分たちに順番が回ってくるまで待つ。わたしを購入してもそれほど役に立たないことには、気がついていない。イライザ・マエがわたしにしがみついてきた。しかしこれはよくない。彼女こそが一番の売りなのだから。いい家庭にもられる可能性がある。このことをいいたかったけれど、だからわたしから離れなさいといいたかったけれど、そうする勇気がなかった。楽団が音楽をならす。歌手たちの一団が歌い始める。まもなく競りがおこなわれる。オークショナーが声を張り上げる。「モマ。」イライザ・マエはその言葉を何度も何度もつぶやく。まるでこの言葉しか知らないかのように。この一言。この一言だけ。(77)

第二部「西部」は、1960年以降に登場した「ニュー・スレイヴ・ナラティブ」との変種と見なすこともできるだろう。マーサにとってはトラウマ的な体験である愛娘との別離を示している場面である。プロローグでのアフリカの父と同様に、ここでのマーサも「罪悪感」と「正当化」の感情を有している。娘を手放してしまったという罪悪感。しかし奴隷である自分にはほかにどうしようもなく、不可避のことであるという正当化。しかし、娘はこれ以降マーサに憑依する。マーサが記憶の中で娘を思い続けるからだ。

マーサはオークションでホフマン夫妻に購入され、夫妻とともにカンザスへ移り住み、しばらく生活する。しかし農場経営に失敗した夫妻は、マーサを売ってカリフォルニアへ移り住むための資金にすることを考える。「二度とオークション台に立つのはいや」(81)と考えたマーサは、逃亡奴隷とな

ることを選択し、ドッジ・シティという町へたどり着く¹³。クリーニング店を経営し、チェスターという名の混血の男性とともに10年間、比較的平穏な生活を営む。この町で南北戦争の終結を向かえる。しかしチェスターは暴徒によって殺害されてしまう。チェスターの死によってマーサはもはや辛い現実を受け入れられなくなり、突然、愛娘イライザ・マエに会いにカリフォルニアへ行くことを決意する。娘とはヴァージニアのオークション台で別れて以来、会っていないうえ、彼女の行方はまったく知らないままであるにもかかわらず。西へ向かう有色人種の男性たちで構成される幌馬車隊に、料理人として加わり、ともにカリフォルニアを目指す。しかし、体力が極度に衰えたマーサは、もはや料理もできなくなり、マーサを足手まといでしかないと判断した隊長により、途中のコロラドのデンバーで馬車から降ろされてしまう。

ここデンバーで、白人の女性に一時身を寄せる場所を提供される¹⁴。しかしそこにはストーブはなく、結局、ここでマーサは命を落とす。死の淵をさまようマーサは、ふたたびイライザ・マエを想う。

夜明け前の冷たい2月の朝、マーサは目を開けた。外はまだ暗かった。夢がまたマーサを捉え始めた。西へ、カリフォルニアへ、一人でいくのだ。そこでイライザ・マエに会うのだ。今では背が高く、がっしりとした体格になった、それなりの社会的地位の女性になったイライザ・マエに。一緒に、つま先立ちになってぬかるんだ道を歩いて、彼女の住居へ赴くのだ。そこでイライザ・マエの教員の夫と三人の子どもたちに迎えられるのだ。驚いたマーサは顔に手を当てる。イライザ・マエは、お母さん、ここにいて、一緒に暮らしましょうといい張るが、マーサは躊躇する。すべてが正しくない。ルーカスについての知らせはないし、今ではイライザ・マエはクレオと名乗っている。マーサはこの名前で娘を呼びたくない。夫と子どもたちは戸惑っている。まもなくマーサが立ち去るときがやってきた。しかし娘は母に東へ戻るように勧める。マーサは、年老いて疲れたので、人前で泣いた。孫たちのまえて。絶対に東には戻りたくない。どこにもいくつもりはない。東には。カンザスへは。ヴァージニアへは。その先へは。彼女には西へ向かう魂があり、それは娘の胸のうちで自然に生まれ、この家のなかにも見つけられる。(93-94)

マーサの想像の中でのイライザ・マエは、自分を売ろうとしたホフマン夫人の名前に変わっている。父親のルーカスについても何の言及もなされない。何かがおかしいとマーサは感じている。この引用のすぐあとは、改段されて「マーサ・ランドルフは今日は洗濯物は受け付けません。おけもアイロンも、料理も。一日中マーサは今日は眠るのです」(94)とあり、マーサの死亡が伝えられる。

「西部」とトニ・モリソンの『ピラブド』との類似性を指摘する批評家は少なくない(クラウ、ギャラット＝プーリエなど)¹⁵。事実、1994年におこなわれたインタビューにおいてもその点が指摘され、フィリップスも「『ピラブド』は非常に影響をおよぼす作品であり続けている」(*Conversation*, 22)と述べている。『ピラブド』においても母娘関係が描かれているのだが、宮本敬子は以下のように、母子表象の問題点を指摘する。

モリソンは奴隷制度という歴史的トラウマを、母子表象として前景化することの危険性を十分に認識していた。それは白人読者を獲得しその感情に訴えるため、白人奴隷廃止論者の政治的言説や、奴隷体験記が伝統的に用いてきた手法だったからだ。『ピラブド』は奴隷制度における「語り得ぬもの」に光をあて、それをしばしば黒人女性の体験と結びつけて描いているが、一方で、語る必要があり、思い出され、再び語り直されねばならない「語り得ぬもの」を、母子表象が覆い隠してしまう可能性をも明らかにしている。(Amazon Kindle, No.5356-57)

奴隷制のナラティヴ(黒人のナラティヴ)が、奴隷制廃止論者側のナラティヴ(白人のナラティヴ)へと、都合良く回収されてしまう危険性がここでは指摘されている。他方で、この問題はメモリー・スタディーズにおける「ポストメモリー」¹⁶構築の過程で必然的に生じてしまう問題であるかもしれない。宮本は続けて母子表象が「遮断幕」、つまり「スクリーン・メモリー」として機能する危険性について指摘する。

母子表象が偏在する[モリソンの]歴史三部作は、「ポストメモリー」の重要な問題、すなわち「経験されたのではなく、遺産として継承された歴史的トラウマ記憶をどのように継承するか」という問題を提起して

いる。トラウマ研究において明らかにされているように、「苦しむ母子像」は、奴隷制度、戦争、ホロコースト、飢餓、災害などの共同体のトラウマ（歴史的トラウマ）となった出来事の記憶に偏在する表象である。マリアンヌ・ハーシュやクレア・カヘインが明らかにしているように、歴史的トラウマの母子表象化は、公衆の感傷的な共感を呼び起こすだけでなく、「トラウマ的出来事における、より重要な意義——そのコンテキスト、個別性、責任、歴史」（Hirsh 18）を覆い隠す、ある種の遮断幕として機能する。(No.5357)

たしかに苦しむ奴隷の母娘の表象には、人の感情に訴えかけるがゆえに、奴隷廃止論者のナラティブへ取り込まれる危険性があり、普遍性が過度に強調されるあまり、苦しむ個人や個々の名前をもつ親子といった個別性が失われるという危険性もある。母娘の苦しみのみに読者の視点が向けられて、そもそもなぜこの母娘が苦しんでいるのか、その苦しみの責任の所在はどこにあるのかという、より重要な問題が覆い隠されてしまう危険性である。『ビラブド』が示す「無垢な犠牲者である子供」（No.5374）から「悪意と復讐心を抱くビラブド」（No.5374）へ書き換えられた理由を、宮本は「トラウマの過去の徹底操作（working through）」（No.5357）に必要な距離を「読者とトラウマ表象との間に作るため」（No.5374）だとしている。

では『クロッシング・ザ・リバー』のマーサとイライザ・マエの母娘関係と、「スクリーン・メモリー」とのかかわりについては、何が指摘できるだろうか。第二部、とくにマーサが死去する場面は、読者の感傷的な感情に直接訴えかけてくるだろう。しかし、第二部は同時にマーサに手を差し伸べようとするデンバーの白人女性が示す親切心の「中途半端性」（暖かい自宅の部屋ではなく、ストーブのない小屋をマーサにあてがったこと）を示唆することで、また、マーサ最期の想像力のなかでのイライザ・マエが「良き娘」ではなく、さらに彼女の名前が白人の女主人の名前に変更されていることで、小説はナイーブな「母子表象」とのズレを際立たせている。マーサとイライザ・マエとの母娘表象に十全に感情移入しようとしても、それをとどめる何かが「西部」にはある。この点において、歴史的トラウマの母子表象と読者のあいだには、トラウマ的過去の徹底操作に必要な距離が保たれているといえる。

2-3. 父と息子 (と妻)

『クロッシング・ザ・リバー』において「父と息子」の関係を扱っている部分として、まずは第一部「異教の岸」における奴隷主のエドワード・ウィリアムズとのちに解放されることになるナッシュ・ウィリアムズとの関係と、次に同じくエドワードとすでに自由人としてリベリアへ渡っているマディソンとの関係の、ふたつを挙げることができる。もちろん、かれらには血のつながりはなく養子縁組の関係である。この第一部に加えて第三部の「クロッシング・ザ・リバー」も「父と息子」の関係が示されている。第三部は奴隷商船の船長ジェームズ・ハミルトンの航海日誌と妻への手紙によって構成されている。ここではジェームズと、すでに亡くなり日誌では不在であるが多大な影響を及ぼし続けている父親との関係が、「父と息子」の関係である。

小説全体を通じて、白人の男性の登場人物に対して読者が共感をもつことはかなり難しいという指摘が可能であろう。彼らに対しては徹底的にそのような人物造形がなされている。第一部のエドワード・ウィリアムズはその典型的な例であるといえる。第三部のハミルトン船長も、ジョン・ニュートンがモデルであると指摘されなければ、とてもこの先英国国教会に回心し敬虔な牧師を務めることになる人物であるとは到底考えられないくらいに、かれは奴隷に対して「同じ人間である」という認識はまったく持ち合わせていない。これに対して、女性の登場人物に対しては読者はかなりの割合で感情移入することだろう。「スクリーン・メモリー」の危険性ゆえに読者は登場人物とは適度な距離をとることが求められるが、そうした留保がついたとしても、例えば、前節でみたマーサ・ランドルフに対しては、やはり人生において彼女が家族を失ってしまったがゆえの悲しみや悲哀は読者には十分すぎるほどに伝わってくる。次節で確認するが、第四部「イングランドのどこかで」におけるジョイスに対しても、読者が感情移入をして共感をもつのは、まったくもって難しいことではない。エピローグでアフリカの父がジョイスのことを「わたしの娘」(237)と呼ぶほどであり、彼女は「黒い大西洋」の構成要員に数えられる。

こうした「共感できない」イギリス人男性と家族の関係を結んだとしても、その結果が幸福なものにはなり得ないことは容易に予想がつく。第一部のナッシュとエドワードの関係はまさに不幸であり、さらに「不適切な父息子関係」であるといえる。エドワードはナッシュに対して、そしてマディソンに

対しても、同性愛の関係を強いていたからである。以下は、ナッシュを探しにリベリアへ渡ったものの、以前所有していたマディソンしか頼る人間のいないエドワードが、かれに性的なまなざしを向けて関係を迫る場面である。

エドワードはマディソンの声に熱心に耳を傾け、その目は元奴隷から離すことがなかった。マディソンはシャツを脱いだ。エドワードはマディソンの質問に対して、ナッシュの子どもたちをアメリカへ連れて行き、文明人の間でクリスチャンとしての教育を施したいのだと答えた。マディソンは顔を背けて、なにもいわずにいた。エドワードは、半分胸をはだけたマディソンに、子どもたちはアメリカへ来るだろうか、何人いるのだ、妻は何人だと質問した。ナッシュは本当に複数の妻を所有していたのか？ マディソンはこれらの質問をすべてのみ込み、元主人の顔をじっと見つめた。ランプの光加減のせいで、エドワードの顔の半分は深い闇に覆われ、半分は赤くなっていた。マディソンがこの連発される質問に答えようとしたとき、エドワードは前屈みになり、「黙って」といわんばかりに手を伸ばし、マディソンの手を握った。エドワードは、自分がどんなに心地の良い自宅から離れてしまったか、自分が属する民族からも離れてしまい、今一度、白人黒人を問わず、自分が接してきた人々と一緒にいたいといった。マディソンは見つめ返し、「いやです」といった。その拒絶の言葉は小さな小屋にこだまし、その重さもその目的も外の音をかき消すほどであった。そして永遠と思われるときを経て、エドワード・ウィリアムズはマディソンの手を離し、自分の薬のベッドにもどった。(68)

本節の冒頭において、本小説の家族関係では「罪悪感」が共通に見いだせる感情であることを指摘したが、ここエドワードにかんしてはその感情を見いだすのは難しい。もっともテキストにおいては、「アメリカ植民協会」に属することで彼は「[奴隷を所有しているという]重荷を下ろすための理想的な機会を得た」(13)という記述はあるけれども。この引用文の含意は、解放奴隷をアフリカへ帰還させることを目的に設立された「アメリカ植民協会」であるため、この団体に所属すれば、たとえ奴隷制度にかかわった者であっても、なんらかの贖罪がおこなえるという意味であろう。しかしことエドワ

ードにかんしていえば、協会に所属すること自体が免罪符となり、そもそも人道的な悪をおこなっているという認識は皆無なのである。むしろかれは協会に属しているだけでもはや「禊ぎは済んだ」という感覚を有しており、テキストでは自己の欲望のままに黒人男性たちを性的に搾取する姿が浮き彫りになる。

そもそも「アメリカ植民協会」自体が、偽善性に満ちた団体であった。加藤恒彦はフレドリック・ダグラスの以下の言葉を引用し、協会は「自由黒人の追い出し図る絶好の機会として利用」(144)していたのだと述べている。以下は加藤が引用するダグラスの言葉である。

「アメリカ植民協会」は、偽善面をして、…奴隷制度への脅威だと考えられた黒人を追い払おうという計画を推進するために、北部でも南部でも新聞が創刊された。…「協会」はわれわれの不幸を遺憾に思うのではなく、むしろ歓喜するのである。というのは、われわれの不幸は白人と黒人が同じ大地のうえで栄えることができないということを証明するからである。(加藤、144)

ナッシュは生前リベリアから何度もエドワードに向けて手紙を送っていたが、主人がかれの手紙を読むことはなかった。返事をよこさないエドワードに対し、しだいに不信感を強めていったナッシュは、宣教師としてのミッションもアメリカの価値観もすべてを捨てて、アフリカの風習になじみ、「アフリカ人」(加藤、145)になっていく。エドワードがかれの手紙を一切読むことがなかったのは、妻のアメリアが手紙をすべて捨てていたからである。夫とナッシュの性的関係に気がついていたアメリアは、自殺を図ることで夫に対する最終的な復讐を遂げる。アメリアとエドワードそしてナッシュの三角関係を考えて、第一部「異教の岸」が示唆していることは、エドワード、アメリア、ナッシュという拡大家族においては、妻アメリアは「他者」であるということである。まさにイヴ・セジウィックの「ホモソーシャル」の概念を具現化するような三者関係となっているといえる。

第三部「クロッシング・ザ・リバー」においては、父親は不在である。しかし息子ハミルトン船長と奴隷制との関係を考えるうえで、この不在の父親は重要な役割を担っている。自分では気づいていないものの、ハミルトン船

長は奴隷制に対して「罪悪感」を抱いており、もっとも抑圧したいこの「罪悪感」という感情を、妻への愛情でもって、糊塗しようとする。つまり第三部「クロッシング・ザ・リバー」においては、かれがイングランドにいる新妻へ向けた書いた愛情に満ちた手紙が、ハミルトンの奴隷制への罪悪感を覆い隠す「スクリーン・メモリー」として機能しているように考えられる。

第三部はハミルトン船長による航海日誌と妻へ向けた二通の手紙で構成される。航海日誌では航海のようすが淡々と、ときに無機質なようすで綴られていく。この日誌が日々明らかにすることは、ハミルトンにとって奴隷貿易とは完全なビジネスであるということだ。奴隷は「人間」ではなく「商品」として記録されている。もちろん奴隷たちに固有名詞はなく、航海後半でマラリアによって奴隷が死亡して初めて、ハミルトンは奴隷を番号で呼ぶようになる。例えば、以下のような記述がある。「4月20日 ふたりの良い奴隷(27番と43番)を埋葬した。突然、無気力症にかかったかのようだった。二人がいた部屋を掃除し、タールとたばこで3時間煙を炊いて、そのあと、酢で消毒をした」(116)。奴隷という商品から最大限の利益をあげることがハミルトンにとっての最大の使命であるので、かれは船内の規律を守ることにも必死である。白人船員たちが規律を乱す行動をとらないかどうか見張るのはもちろんのこと、奴隷が反抗したり、反乱をおこさないように見張ることもっとも気を配っている。合理主義的な資本主義が船を支配していると指摘できる。

他方で、ハミルトンは妻へは並々ならぬ愛情に満ちた手紙を書き送っている。

告白しますが、ひとりのとき、あなたと一緒にいた時間を思い出すと優しい気持ちになります。涙さえこぼれてきます。あなたがわたしを愛していることを知っています。…今のわたしの望みは、将来、あなたとの子どもをつくること、家族として一緒に暮らすことです。船旅の終わりのこの風景は、あまりにもわたしの頭の中で定まっているので、ここで苦しんだ難しい時期も、あとで報いられることでしょう。愛する夫のジェイムズ・ハミルトンより (110)

妻に対しては人間らしい愛情に満ちた視線をむけることができるのに、黒

人奴隷に対してはその片鱗も見せることはないハミルトン船長。奴隷制度の倫理的意味など歯牙にもかけないかのようなハミルトンであるが、商売をつうじて二年前に死去した父親をよく知る人物であるエリス氏に出会うと、奴隷貿易の道徳的な意味を考え始めるようになる。エリス氏が示唆することには、父親は奴隷たちと適切な距離を取らなかったがゆえに、まわりに不快感を与えたというのである。妻への二通目の手紙でハミルトンは以下のように書いている。

わたしのこの不眠とこのストレスの原因は、エリス氏という人物との折り合いの悪さにあります。あらゆる機会を捉えて、亡くなった父親について尋ねるのですが、かれはうまく答えをはぐらかします。二年前に死去した父親が命を落とした場所に連れて行ってくれと頼むのですが、しかしわたしのこの願いを聞き入れてはくれません。わたしのこの苦しみを取り除く必要性があることは明らかなのですが、父が賢い商売をしていなかった、あまりにも精力的に働き過ぎたのだと匂わせるだけなのです。さらには父がかなりの嫌悪感を生じさせてしまったといえます。ビジネスの距離を置かずに。かわいそうな生き物たち [奴隷] に対して。そしてわたしに同じ過ちをしないようにというのです。(118-119)

上記の場面でのハミルトンは、尊敬する父親が奴隷たちに対してビジネスにふさわしい距離を取らなかったと聞いて、動揺を露わにしている。ビジネスなのだから倫理的道義的意義を今まで問いかけることをしなかったかれが、尊敬する父親が奴隷貿易の倫理性に疑問を抱いていたらしいことを耳にして初めて、かれの心の中にも同じ疑問が浮かんできたのである。奴隷貿易に携わっているという「罪悪感」は、じつはもともとハミルトンの意識下にあったのだろう。それがエリス氏との会話がきっかけとなり、現れ出てきたと考えられる。

奴隷制度に従事することで抱く「罪悪感」は、ハミルトンがもっとも抑圧したいと願う感情である。この感情をなんとか抑圧しようとして、船内では無慈悲にも奴隷を商品とみなし、他方で、妻に向けた手紙の中では人間らしい愛情を示す。ここに分裂したハミルトンの姿をみてとることができる。そしてかれの不安感を綴った妻への手紙は、「罪悪感」を抑圧するための遮断幕、

つまり「スクリーン・メモリー」として機能していると考えてよいだろう。

ハミルトンは航海終盤に「二人の頑強な若い男性の奴隷と、一人の気高い少女の奴隷を購入する」(124)。この三人はナッシュ、トラヴィス、マーサというアフリカの子どもたちを指すと考えられる。アフリカの父の子どもたちは、ジェームズ・ハミルトン船長によって大西洋を越え、新大陸へ渡るのである。

3. 「女の大西洋」

『クロッシング・ザ・リバー』第四部「イングランドのどこかで」は、基本はアフリカの父の息子のトラヴィスを扱った部分であるが、第四部の大半は、イングランド北部（おそらくは作者の出身地リーズ近郊）に住むジョイスの日記によって構成されている。この日記は過去から現在へいたる時間軸に沿ったものではない。小説第四部では米兵が村に来た1942年から始まってはいるが、戦時中の記述が続くかと思えば、次には1930年代のジョイスの子ども時代や母親との関係の記載へと変わり、第二次世界大戦開始直前の夫レンとの出会いや、その後の戦時中の記述に戻る。結婚前にレンの店で働いていたサンドラとの交友関係と彼女の死¹⁷、さらにレンの営む闇市商売のようす、レンの逮捕、トラヴィスとの出会い、空襲による母親の死、トラヴィスとの恋愛、トラヴィスのイタリア出征、トラヴィスの死、レンとの離婚、生まれたばかりのトラヴィスとの子どものグリアを養子に出したこと、そして1963年のグリアの訪れという、まさにジョイスの半生のようすが断片的な日記形式のナラティヴによって語られていく。

ジョイスは母親とは折り合いが悪く、そうした幸福ではない母娘関係から逃れるためだけにレンと結婚する。「わたしは思った。この家にいると叫びたくなると。[結婚すれば、]少なくともこの家から出て行ける」(132)。そうした母子関係だったが、空襲で母を亡くして初めて、ジョイスは母親と折り合いがつけられたような気がしたようである。墓前でジョイスは母親に対して、以下のように話かけている。

おかあさん、こんにちは。お父さんにはまた会えた？ もし会えたのなら、幸せでしょうね。とにかくわたしよりも幸せなのはたしかだわ。そ

うじゃないわけじゃないもの。わたしよりも不幸なら、お母さんは大馬鹿者ということになるわね。母は、今は神さまのもとにいるのだから、わたしのいうことを聞いてくれているような気がした。生きていたときには絶対にやってくれなかったこと。(187)

ジョイスの父親は第一次世界大戦で戦死し、以来、母親はキリスト教に帰依することで心の平安を保ってきた。積極的にではないにせよ、母親がレンとの結婚を許可したのも、レンが兵役に適さない身体であったために兵役が免除されていたからだった。実家の母親との関係も、結婚後のレンとの関係も、決して良いとはいえないジョイス。(レンはジョイスに暴力を振るっていたことが、「鞭を打つため」(173) という表現からうかがい知ることができる。「鞭打ちされる」レンとの結婚生活での彼女の地位は、奴隷制度のなかの奴隷と変わらない。)彼女の日記からは、1930年代および40年代イングランド北部における機能不全に陥ったある家庭のようすが浮き彫りになっている。

ポール・ギルロイの「黒い大西洋」という概念を小説というかたちで具現化したと思われる小説『クロッシング・ザ・リバー』に、北イングランドに居住するジョイスの物語を含み入れたのは、ギルロイのこの「黒い大西洋」という概念に、当然のことながら、イングランドが網羅される点を再確認するためと考えられる。ギルロイの『黒い大西洋』においてはアフリカやカリブ海植民地、アメリカ大陸、そして大西洋が前景化されて議論の対象になっており、ヨーロッパやイギリスは後退し後景化されている。しかし、ときに「カリブ海植民地は資本主義の実験場」といわれるように、そして第三部のハミルトン船長の奴隷船を動かしていたのは「合理主義的資本主義」であったように、奴隷制度や植民地主義そして帝国主義を考察する際には、「ヨーロッパの近代」、つまり啓蒙思想、近代資本主義、さらに合理主義が、まずは問われなくてはならない。イギリスとヨーロッパはもちろん「黒い大西洋」に含まれるのだ。

イギリス人女性のジョイスが「黒い大西洋」へ参入していくのは、もちろんトラヴィスとの関係性ゆえである。夫レンが投獄されているあいだ、ジョイスはレンが経営していた雑貨屋をかれの代わりに営んでいる。小説は、黒人兵を導入する前に、まず白人のアメリカ兵を登場させている。アメリカ本

土での人種関係をそのままイングランドの村へ持ち込むようすが、ひとりのアメリカ人将校の横柄な態度によって示されている。

今日、サングラスをかけた米兵がやってきた。店内に入っても、サングラスをとらない。この村に駐屯している兵士について少し話しにやってきた。ああ、そうですか。聞いていますよ。これらの多くの兵士[黒人兵]は平等に扱われることになれていないのです。だからかれらの反応に驚かないでください。どうなるというのだらうと、わたしは思った。微笑んだら床にひれ伏すだけでも。教育を十分に受けていないので、あなたたちのやり方に慣れるのに少し時間がかかるのです。ですから、どうか我慢してください。そうですか。いまや彼はリラックスし、たばこを吸ってもいいかときいた。どうぞ、と答えた。気取ったゲス野郎だと思った。軍服を着て、仲間の兵士のことを陰で悪口を言っている。サングラスをかけたままで。ほかの場所じゃなくてどうしてここに問題児をよこしたのです。いえいえ問題児ではありません。ただ違うだけなのです。われわれはただ少し我慢してくださいといいただけなのです。そう言って微笑み返した。あの白い歯、自信ありげな態度、たばこをゆっくりと吸って煙をだしている。自分のことを大物だと思っている。(145)

第四部を通じ、ジョイスは公平で正義感にあふれた強い女性として描かれている。上記の引用文でも、将校が同じ「仲間」であるにもかかわらず、黒人兵を悪しざまにいうとして、かれを非難している。対照的に、黒人兵がジョイスの店を訪れた際には、礼儀正しいと感心している。「二人が店に入ってきた。一人は背が高い。もう一人はそうでもない。しかし背が低いわけではなかった。決して。二人とも体格はがっしりとしていて、二人とも礼儀正しかった」(149)。この店を訪れた二人の黒人兵のうちの一人がトラヴィスであった。

プロローグから第三部にいたるまで奴隷貿易と黒人離散のようすを淡々と記述してきた『クロッシング・ザ・リバー』において、ここ第四部のジョイスとトラヴィスが出会い、愛に満ちた関係を築き、「家族になる」ようすを読むことは、読者に心の平安を与えることになるのではないだろうか。おそらくはジョナサン・ワーズワースを知らないトラヴィスが、黄水仙の花束を

もってジョイスの店に行き、その花束をジョイスの母親の墓前に手向ける場面は、小説のなかでもとりわけ印象に残るシーンである。

でも今日はすべてがまた大丈夫な一日だった。彼が店にやって来たからだ。顔に満面の笑みをたたえて。水仙の花一束を抱えて。どういっているのか分からなかった。この花を以前一度も見たことがなかったはずだし、どこに咲いているのか分からないはずだ。でもかれはわたしにこれをもってほしいと考えたのだ。きちんとした身なり。話すときにチューイングガムをかみはしない。ほかの人々やほかの将校とは違うのだ。どうしてガムをかむことがいいことだとみなされているのか、まったく分からない。だらしが無い。だれでもそんなことくらい分かるのに。彼の髪は櫛が通っていて、短い髪で、黒い毛糸のように細く、光っていたから、オイルかなにかをつけていたのだろう。「さあ、どうぞ。受け取ってください。」彼は花を手渡し、わたしはお礼をいった。わたしはイチゴジャムの壺を探した。彼はたばこを手にとった。「すみませんが、たばこをすってもいいですか？」どうぞ。わたしはこのどうぞという言葉は使わなかったが、かれはそう理解してくれたと思う。すぐに戻りますとわたしはいった。店を見ていてくれませんか。わたしは裏へいき、壺を見つけた。店に戻ると、まるでわたしの一部のように、わたしの予備のように立っていた。どうしていいのかわからないようだった。そしてわたしは中で水仙が誇るように咲いている壺を手にして戻った。

(166-167)

黄水仙はイギリスでは春の象徴とされる花であり、ロマン派の詩人ジョナサン・ワーズワースの詩にあることでも有名である。戦時中という陰うつな時期に、黄水仙をふたりが親しくなり始める場面において導入することで、暗い中にも明るい未来をほのかに予感させるシーンとなっている。まるでモノクロのシーンに黄色が突然に登場したかのよう。黒人米兵のトラヴィスがイギリス人女性ジョイスと、黄水仙（とワーズワース）というイギリス的なアイコンを通じて「結びついている」（サイドの言葉を思い出そう）。

しかしジョイスとトラヴィスが一緒にいて関係を築くことができたのは、ほんの短期間でしかなかった。トラヴィスはイタリア戦線へと送られ命を落

とす。トラヴィスとのあいだに子どもができたジョイスではあったが、「コーヒー豆のような赤ん坊」(228)を単身で育てる自信は彼女にはなかった。それゆえにジョイスは福祉課の女性に息子のグリアを託す。ジョイスは息子を失う。小説は「子どもを失う」というジョイスが被ったトラウマ的体験を、福祉課の女性の服装を繰り返し反芻する彼女の心情のなかに反映させている。

1945年

だれも何も言わなかったが、この子を取り上げてタオルでくるんだとき、彼女たちが何を考えているのか分かった。わたしは赤ちゃんを見つめた。わたしの美しい息子。看護師がかれをわたしの隣に置いた。コーヒーのような子ね。この子の父親が一度もこの子に会うことがないということ、そのときは知らなかった。のちに電報をもらったあとで、戦争が終わったあとで、青いコートを着て栗色のスカーフをした女性がやって来た。わたしを見る目からなにを考えているのかわかった。気の毒な幻滅したばかな女。だれかべつの人がこの子を見てくれたら、あなた、もっと暮らしがよくなるのよ。信じて。どういうことなのか、ちゃんとわたしは理解していた。どうするつもり？ あなたが今、気にすることではないわ。さあ、冷静に考えましょう。そしてわたしたちは、息子とわたしは、冷静に考えた。わたしと、青いコートを着て栗色のスカーフを巻いた女性に自分を引き渡すことを、わたしに頼んだわけではない、わたしの息子とで。(228)

再び上記の引用文において、本小説の親である登場人物たちの多くが共通して抱く「罪悪感」と「正当化」を読みとることは可能である。福祉課の女性の服装の反復はもちろんジョイスにとってのトラウマ的体験を示しているが、同時に、「戦時中であるし、シングル・マザーであるし、ましては混血の子どもであるから、育てることは不可能だ」という「正当化」の思考も見えてとれる。小説冒頭のアフリカの父による「なんという愚かしさ。不作だったからだ。わたしは子どもを売った」(1)という表現は、まるで「行為遂行の入り口／始まり」(クラウ119)であるかのように、小説各部の親たちによって反復され、ゆえに行為遂行される。

白人女性であるジョイスは、小説最後のエピソードでアフリカの父によっ

て「わたしの娘」(237)と呼ばれている。これはジョイスが「黒い大西洋」に構成員として加わったことを示している。「黒い大西洋」へ白人女性が参入する。これををもって、『クロッシング・ザ・リバー』においては「女の大西洋」(“a Female Atlantic”)と呼びうる何ものかが形成されているのではないかと指摘する批評家がいる。アン・ギャラット＝ブーリエはエリザベス・デローレイの論文を引用しつつ、次のように「女の大西洋」という概念を説明する。

この「女の大西洋」とは、ギルロイが示したアフリカン・ディアスポラの純粋に男性的な経験を、拡大して解釈するものだ。これは置換と移動の象徴的な概念から構成される。さらに旅や航海という実際の歴史の経験とはべつものである。ポストコロニアル・ディアスポラ理論においては、海を渡る航海はたいてい男性の経験として表象されてきた。(53)

小説において「女の大西洋」実現の可能性を指摘しながらも、ジョイスとマーサは国内(家庭内)にとどまるのに比して、ナッシュとトラヴィスは海を渡る。ゆえにギャラット＝ブーリエ(とデローレイ)は、この小説を「男性的なパラダイムの域を出ることはない」(53)小説と結論づけている。

わたしには白人女性を「黒い大西洋」に含み入れた『クロッシング・ザ・リバー』は、行為遂行的(パフォーマティヴ)に「女の大西洋」を成立させているのではないかと考えられる。『クロッシング・ザ・リバー』におけるマーサとジョイスは、ともに子どもを手放し、そのことを後悔し、程度の差はあるものの何らかの「罪悪感」を抱いている。第二部そして第四部において、繰り返し、彼女たちが苦悩し罪悪感にさいなまれるようすを示すことで、読むたびごとに、その都度その都度、読者も「女の大西洋」にまつわる女性たちの悲しみと罪悪感の経験を追体験することになる。

さらにいえば、キャリル・フィリップスは1991年の小説『ケンブリッジ』において、父の残した遺産であるカリブ海のサトウキビ農園を管理するためにイングランドから大西洋を越えるエミリーというヒロインを描いている。また2015年には、カリブ系黒人の男性とのあいだにふたりの息子をもうけるのだが、しかしながらそのふたりを失ってしまう白人女性モニカ・ジョンソンの物語を主軸においた『ロスト・チャイルド』という作品を上梓している。

モニカは次男を誘拐されたうえに殺害され、長男についてはモニカ自身が自殺を図ることで、親子関係そのものが破綻する。白人プランターのエミリーは「黒い大西洋」を渡るし、白人女性モニカはジョイスと同様に混血の子どもたちを手放してしまう。エミリーとモニカはどちらも白人であるが、ストーリーを考えると、彼女たちもジョイスと同様に「黒い大西洋」の構成メンバーに数えられてもよいだろう。フィリップスは、1991年、1993年、そして2015年と、すくなくとも三作品において、「黒い大西洋」を渡り、「黒い大西洋」へ密接にかかわっていく白人女性たちを描いている。フィリップスの小説に登場する登場人物も、そしてそれを読む読者も、「黒い大西洋」と「女の大西洋」を、これらの小説を手にするたびごとに、彼女たちと「ともに」、彼女たちと「結びついて」、 「黒い大西洋」を体験しているのだ。こうしてフィリップスの小説は、行為遂行的に、近代ヨーロッパを「黒い大西洋」によって代補し、そして「黒い大西洋」を「女の大西洋」によって代補している。さらにタイトルの「クロッシング」という言葉に着目するならば、この現在分詞型は「継続」を示しており、過去分詞型とは違って「完了」を意味しない。つねにすでに「進行形」の「終わりなき」代補を、小説はそのタイトルによって示唆しているとも考えられる。

結び

子どもを売ったことを嘆くアフリカの父は、プロローグでは「共通の記憶のコーラスがわたしに憑依し始める」(1)と語っている。アフリカの父は「二百五十年のあいだ、わたしは多舌のコーラスに耳を傾けてきた」(1)という。しかし、小説本体で黒人離散が物語られたのち、エピローグでは、「多舌のコーラス」はさまざまなトラウマ的体験をした人々の「生存者の声」(237)のコーラスへと変換している。二百五十年間のあいだ「河の向こう岸で風が吹くのをじっと待っていた。太鼓の音が河の水辺にさざ波を立てるのを待っていた。コーラスの聲が高まるのを待っていた」(2)というアフリカの父は、エピローグでは以下のように語っている。

わたしは叫ばれた声に耳を傾けてきた。わたしには夢がある。いつの日かジョージアの赤土の丘の上でかつての奴隷たちの息子たちとかつての

奴隷主の息子たちが兄弟というテーブルと一緒につくことができることを。わたしはトリニダードでアフリカのカーニバルの音に耳を傾けてきた。リオで。ニューオリンズで。河のはるか向こう岸では太鼓は打ち続けられる。多舌のコーラスは音を大きくする。そしてこれら生き残った者たちの声のなかに時々わたし自身の子どもたちの声を聞くのを願う。わたしのナッシュ。わたしのマーサ。わたしのトラヴィス。(237)

上記の引用文では、キング牧師の演説の一節を語りに加えることで、実際の歴史と虚構の物語が「結び」ついている。「結びについて」「生き残った」「多舌のコーラス」は、なにも黒人だけのものではない。以下の引用文にあるようにハミルトン船長の言葉も加わる。〈黒人〉対〈白人〉、〈男性〉対〈女性〉、〈奴隷の子孫〉対〈奴隷主の子孫〉という二項対立を超えて、「すべての人々」(237)が「多舌のコーラス」に加わって「結びつく」のである。

わたしの娘。ジョイス。すべての人々。傷ついてはいるが決意をした者たち。パニックになるときだけ、手首と足首を使ってハミルトン船長の拘束具に抗うのだ。罪深き父親。だがいつでも耳をすませている。水中には道はない。道しるべもない。後戻りはできない。なんという愚かしさ。不作だった。わたしは子どもを売った。二人の体格の良い少年と、自尊心に満ちた少女を買った。しかしかれらは、愛されて、遙か遠くの向こう岸へと到着したのだ。(237)

このようにアフリカの父の語りは、(そして小説自体も、)かれらが生き残ったことを示唆して終わっている。ここエピローグでの「多舌のコーラス」には売られたアフリカの子どもたちだけではなく、小説第四部で登場するトラヴィスとのあいだに子どもをもうけるジョイスや、小説第三部に奴隷船の船長の白人男性のハミルトン船長も含まれるのである。人種もジェンダーの差異も関わりなく、奴隷制とその遺産に何らかの影響を被った全ての人々によって構成され「生き延びた」人々による「多舌のコーラス」を示唆しつつ、フィリップスによる小説版「黒い大西洋」は幕を閉じるのだ。

註

- ¹ 本論文は、成蹊大学アジア太平洋センター研究プロジェクト「災害文学の可能性」（プロジェクト代表者は文学部庄司宏子教授であり、2020年度より3年間のプロジェクト）の研究会（2021年1月23日ZOOMにて開催）での口頭発表論文に、加筆と修正を加えたものである。
- ² 例えばフランスでの関連した刊行物としては、以下のものがある。Francoise Kral, *Sounding out History: Caryl Phillips's Crossing the River* (Presses Universitaires de Paris Nanterre, 2017); *Caryl Phillips: Commonwealth Essays and Studies* (Vol.40, No1, Autumn, 2017).
- ³ 代表的な学術書としては以下を参照。Benedicte Ledent, *Caryl Phillips* (Manchester University Press, 2002); Helen Thomas, *Caryl Phillips* (Northcote House Publishers, 2006); 加藤恒彦、『キャロル・フィリップスの世界』(世界思想社、2008)。
- ⁴ ポストモダニズムにおける「歴史」の問題をポストコロニアリズムの「歴史」に適用することの難しさを指摘した批評としては、以下を参照。Linda Hutcheon, *A Poetics of Postmodernism* (Routledge, 1988); Robert Young, *White Mythologies* (Routledge, 1990).
- ⁵ Stef Craps, *Postcolonial Witnessing* (Macmillan, 2012); Marianne Hirsh, *The Generation of Postmemory* (Columbia University Press, 2012); Michael Rothberg, *Multidirectional Memory* (Stanford University Press, 2009).
- ⁶ Anne Whitehead, *Trauma Fiction* (Edinburgh University Press, 2004); Cathy Caruth, *Unclaimed Experience* (John Hopkins University Press, 1996).
- ⁷ ジャック・デリダの「代補」(supplement)の概念を念頭においている。つまり一見すると内部の充実性を補っているように見えるが、実際はその充実性を可能にしているようなもの。「ヨーロッパ近代」を補っているように見えて、じつは「ヨーロッパ近代」そのものを成立させていたものが、「黒い大西洋」(と「女の大西洋」)だったのではないだろうか。
- ⁸ 小説が扱う場所は、まずアフリカ、次にアメリカ、大西洋航路を経て、イングランドとなる。これは大西洋奴隷貿易におけるヒトとモノの移動をなぞらえており、これらの地域をつないでいると指摘できる。

⁹ 研究会で、プロジェクトのメンバーの植松なつみさんから以下のような有益な指摘をいただいた。小説は家族に深くこだわっており、第二部は「神さま／お父さん、なぜわたしを見捨てたのですか？」という彼女の最期の言葉で終わっており、続く第三部ではハミルトン船長が妻へ「あなたとの子どもをもうけて家庭を築きたい」と手紙で綴り、さらに第四部ではナッシュとジョイスのあいだにグリアという息子が誕生するため、小説の各部は大西洋奴隷貿易の場を通してつながっているだけでなく、家族や家庭の構築という面において「つながっている」のではないか、というものである。小説ではさまざまな「つなぎ」の工夫がなされている。

¹⁰ フィリップスも以下の小説においてユダヤ人離散と黒人離散を併置して扱っている。*Higher Ground* (1989) および*The Nature of Blood* (1997) である。イギリスでの教育機関における黒人の歴史の欠如が、ユダヤ人の歴史に目を向けさせたと旅行記*The European Tribe* (1987) にある。こちらの分析については小林英里「ポストアウシュヴィッツ文学の可能性」(2019)を参照。

¹¹ 例えば以下を参照。https://www.youtube.com/watch?v=rFwwj95CmU0
また、フィリップス作品の音楽性については以下を参照。Giulia Mascoli, “‘The River That Does Not Know Its Own Source Will Dry Up’: Caryl Phillips’s Musicalized Fiction,” *Caryl Phillips: Commonwealth Essays And Studies* (Vol.40, No1, Autumn, 2017) : 81-94. タイトルはE. K. Brathwaiteの*Masks*という詩集から取られたとヘレン・トマスは指摘している (41)。フィリップスは1994年におこなわれたインタビューの中で、ブラスウェイトの詩集に同じタイトルの詩があることを指摘され、「本当かい？もともとこのタイトルを思いついたのは5、6年前なので、かれのその詩を読んだことを忘れていたのかも知れない」(22) と述べている。*Conversation with Caryl Phillips* (University Press of Mississippi, 2009) :19-26を参照。

¹² 本作品ではさまざまな文学作品が先行テキストとして取り入れられている。Harriet Beecher Stoweの*Uncle Tom’s Cabin* (1853) のヒロイン名が⁸ “Eliza May” であることをAnne Garrait-Bourrierは指摘している。“The Destruction and Impossible Reconstruction of Family Links in *Crossing the River* by Caryl Phillips,” *Caryl Phillips: Commonwealth Essays And Studies* (Vol.40, No1, Autumn, 2017) : 45-58を参照。

¹³ この地でルーシーという女性と親交する。「女同士の連帯」を彷彿とさせる関係を築くが、ルーシーは結婚してカリフォルニアへ行くために、別離となる。

¹⁴ 加藤恒彦は「西部」においてマーサが一時的にも白人女性と交流するため「心にしみる温かい作品」(163)であるとしているが、わたしはそうは思わない。彼女はストーブのある「暖かい」自宅ではなく、ガレージのようなストーブのない小屋へとマーサを連れて行く。雪降る通りよりは「まし」かもしれないが、凍死寸前の黒人女性に対してなぜ暖かい部屋と食事を与えてあげられないのだろう。第二部末部でこの白人女性は冷たくなったマーサの身体をみて、「墓石にはなんと刻めばよいのだろうか」(94)と思うだけである。非常に皮肉な終わり方をしている。

¹⁵ 『黒い大西洋』においてギルロイも最終章で『ピラブド』を論じている。187-223ページを参照。

¹⁶ Hirsh参照。Hirsch Marianne, *Family Frames: Photography Narrative and Postmemory* (Harvard UP, 1997); *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust* (Columbia UP, 2012).

¹⁷ サンドラは夫の出征中に寂しさから、レンの友人と関係を持ち、妊娠する。休暇を取って帰省した夫が、彼女の妊娠を知る。怒りのあまり、夫は彼女をライフル銃で撃ち殺す。「女同士の連帯」をサンドラと結びつつあったジョイスは、怒りを向けるべきは妻ではなく相手の男性であるはずなのにと考える。事件後、レンとそのサンドラの相手がパブでなにもなかったかのようにビールを飲んでいる姿をみて、ジョイスは男たちに並々ならぬ怒りを感じる。

引用文献

Bentley, Nick. "Narratives of Trauma and Loss in Caryl Phillips's *Crossing the River* and *A Distant Shore*." *Caryl Phillips: Commonwealth Essays and Studies* Vol.40, No.1 (Autumn, 2017) : 21-32.

Caruth, Cathy. *Unclaimed Experience*. Baltimore, Maryland: John Hopkins University Press, 1996.

Craps, Stef. *Postcolonial Witnessing*. Basingstoke, Hampshire: Macmillan,

2012.

Deloughrey, Elizabeth. "Gendering the Oceanic Voyage: Trespassing the (Black) Atlantic and Caribbean." *Thamyris* 5.2 (Autumn 1998) : 205-231.

Garrait-Bourrier, Anne. "The Destruction and Impossible Reconstruction of Family Links in *Crossing the River* by Caryl Phillips." *Caryl Phillips: Commonwealth Essays and Studies* Vol.40, No.1 (Autumn, 2017) : 45-58.

Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1993.

Hirsh, Marianne. *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust*. New York: Columbia University Press, 2012.

---. *Family Frames: Photography Narrative and Postmemory*. New York: Harvard University Press, 1997.

Hutcheon, Linda. *A Poetics of Postmodernism*. London and New York: Routledge, 1988.

加藤恒彦。『キャロル・フィリップスの世界』。京都、世界思想社、2008。

小林英里。「ポストアウトシュヴィッツ文学の可能性」。『英語英米文学研究の現在』。東京、風間書房、2019年3月、223—254頁。

Krau, Françoise. *Sounding out History: Caryl Phillips's Crossing the River*. Paris: Press Universitaires de Paris Nanterre, 2017.

Ledent, Benedicte. *Caryl Phillips*. Manchester and New York: Manchester University Press, 2002.

---. "'Overlapping Territories, Intertwined Histories' : Cross-Culturality in Caryl Phillips's *Crossing the River*." *Journal of Commonwealth Literature* 30.1 (1995) : 55-62.

Mascoli, Giulia. "'The River That Does Not Know Its Own Source Will Dry Up' : Caryl Phillips's Musicalized Fiction." *Caryl Phillips: Commonwealth Essays And Studies* Vol.40, No1 (Autumn, 2017) : 81-94.

宮本敬子。「トニ・モリソンと歴史的トラウマ表象」。『ユリイカ:特集 トニ・

- モリソン』(2019年10月号) Amazon Kindle版、No.5262-5613。
- Phillips, Caryl. *Higher Ground: A Novel in Three Parts*. 1989. New York: Vintage International, 1995.
- . *Cambridge*. 1991. New York: Vintage International, 1993.
- . *Crossing the River*. New York: Vintage International, 1993.
- . *The Nature of Blood*. 1997. London: Faber and Faber, 1998.
- . *Conversations with Caryl Phillips*. Renee T. Schatterman, ed. Jackson: University Press of Mississippi, 2009.
- . *The Lost Child*. Croydon: Oneworld Press, 2015.
- Rothberg, Michael. *Multidirectional Memory*. Stanford: Stanford University Press, 2009.
- Thomas, Helen. *Caryl Phillips*. Horndon, Tavistock: Northcote House Publishers, 2006.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1993.
- Ward, Abigail. *Caryl Phillips, David Dabydeen, and Fred D'Aguiar: Representations of Slavery*. Manchester: Manchester University Press, 2011.
- . "An Outstretched Hand: Connection and Affiliation in *Crossing the River*." *Moving Worlds: A Journal of Transcultural Writings* 7:1 (2007) : 20-32.
- Whitehead, Anne. *Trauma Fiction*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2004.
- Young, Robert. *White Mythologies*. London and New York: Routledge, 1990.